

「総合文化学」としての英語学と英語教育*

中 田 康 行

English Linguistics and English Language Education as Interdisciplinary Cultural Studies

Yasuyuki NAKATA

はじめに

20世紀に入って学問分野は細分化され、研究者は専ら自分の専門研究分野を極めることに傾倒してきた。しかし、20世紀後半から今日にかけ、多くの研究分野で過去100年くらいの研究方法と、そのありようの欠陥が真剣に認識され始めて来ている。そのような認識は「学際的研究」(interdisciplinary studies) という術語に示されているとおりである。

古代ギリシアのプラトン、アリストテレスらの大哲学者¹を始め、ヨーロッパ中世後期のルネッサンス期にイタリアで活躍したブラマンテ、ミケランジェロ、ダビンチ等、巨匠たち²の研究心旺盛さと、研究者としてのスケールの大きさには驚嘆させられる思いである。これらの学者の行った業績の偉大さを考えると、今日の研究者の仕事は、細分化された専門研究の面では優れているが、スケールの面では遠く及ばないだろう。

以上のような「学際的考察、学際的研究」の観点から以下で英語学と英語教育を関連させる議論を展開し、何故そのような視点が必要なのかを、様々な具体的問題と関係付けて示すことにしたい。以下の議論はそもそも筆者が行った講演を基にしたものである。その講演の中で英語教師はどのような言語学的知識を有しているべきなのか、またそのような知識を有していることからどのような利点が生まれてくるのかを示唆しておいた。

I 言語教育を取り巻く現状

I. 1 海外旅行、海外渡航

旅行、ビジネス、学業、研究等、実に様々な目的から過去数年に亘り年間1,600万人以上の人々が海外に出かけている。この事実は凄まじい現実であると同時に語学的にも無視できない事実である。無論、この1,600万人の全てが英語圏の国に行くとは限らない。その中には英語の堪能な人もいるだろう。だが、たいていは旅行会社主催の短期海外旅行なのである。たとえ旅行会社主催の海外旅行に参加したとしても、常にツアー・コンダクターが、ある特定個人の面倒を見てくれるわけではない。そこで、旅行者たちは、なにがしかの状況で英語を使わざるを得ないことも事実である。結局、彼らはあやふやな英語の知識と理解のままで英語を使って係わらざるを得なくなる。このような事実が示唆することは、外国語として英語を学んでいる人が英語圏あるいは他の言語圏の国に行き、あやふやな英語の知識のままで、何がしかの係わりを起こすと、相手から誤解されるし、それを訂正出来ないまま日本に帰国してしまう、という

事実である。それは、ひいては、日本人の英語力についての（おそらく、あまり妥当ではない）「全体的な評価」を招く危険性があるということである。それ故、話し言葉の英語を真剣に身に付けなければならない必要性はこれまでになく着実に高まっている、と言える。

あるフランス人の小学校の坊やの話がある。この坊やは学校で、数年、英語を勉強した後、旅行で英国に行った時に、自分の話す英語が分かって貰えず、さらには周囲の人々の話す英語が殆ど理解できなかった。このような事例は多数。この坊やは帰国後、母親に「だってみんな学校で習ったのと違う英語を喋っているんだもの。」と泣きついた、という。また、以上との関連で言えば、学校で学んだ語学の知識が全てだという稚拙な誤解から、訪ねた目標言語の国の人々が話す言語が「正しくない」といった批判まで行う人々の事例もある。³

次に、話し言葉の学習の現状について述べておかなければならないだろう。たとえば、50年くらい前と今を比べると、テープ・レコーダやディスク、コンピュータ、視聴覚教材等の道具類や電子教材の発達により話し言葉の研究・学習は飛躍的に改善された。しかし、残念ながら個人個人の語学上達度は機械や道具類の発達とは一致せず、相変わらず個人の努力や熱意に委ねられている。

以上の議論を通して、結局、英語（話し言葉）の必要性の着実な高まりが確認された。加えて、言語は様々な“variation”（個人、年代、方言等）で異なっており、さらに言語というものは時、場所、話し手自身の社会的地位、話し相手の如何等により、言語が用いられる特定の社会状況に応じて厳密に使い分けられるものである旨のことも示唆しておいた。この問題は後に（Ⅲ. 1）で再度詳しく取り上げる。

I. 2 世界の英語

英語を母国語とする国はイギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド等であるが、数億人が様々な標準的英語を用いている。何か絶対的基準を満たす「標準語」などというものは存在しない。準母国語、ないしは第二言語として英語を用いる国も数多いが、その中にはインド、シンガポール、マレーシア、香港等が含まれる。少なく見積もっても数億人という人間が様々なバラエティに富む英語（の変種）を話している。そのような変種の英語は、よく傾聴しても聞き分けにくいことがあるけれども、場合によっては耳が慣れてくるに従い、標準的変種の英語とは随分発音の異なる英語（の変種）だと分かることが多い。次に外国語として英語を学んでいる国はさらに数多い。日本、韓国など多数の国々がそうだが、世界でその人口は夥しい数になるだろうし、確定的な数字は挙げられないだろう。おそらく数十億人という曖昧な言い方が最適なのかも知れない。

世界には数多くの英語がある。標準語といえども、イギリスとアメリカの標準語には発音、文法、語彙等の面でなにがしかの変差が認められるし、アメリカの標準語を取り上げても、合衆国東部、西部、南部の標準語の区別がある。加えて世界の英語を考えた場合、見通しはもっと危うくなって来るだろう。従って、これこそ「純粋な英語」などというものは存在しない。そこで、平坦な日本語的発音、そして妙に堅苦しい“bookish”な“Japlish”などと揶揄される日本人の英語でも、正確な文法構造と語順、許容可能な発音をすれば十分通用するものであることを理解しておかなければならない。筆者は敢えて“Japlish”なる英語を薦めるものではないが、そのような“Japlish”であれば、発音はうまいけれども文法構造が分からないが故の意味不明な発言よりは随分ましだと考えている。

I. 3 「英語教育」の“boundaries”について

日常の様々な場面で「児童英語」、「小学英語」、「中学英語」、「高校英語」、「大学英語」などという言い方がなされるものである。残念ながら「大学院英語」という言い方はない。このような「一英語」という言い方が成される背景には、教育制度上で学校組織のレベルが違う、という含みはあるが、本来、それぞれ単独で何か特殊な「英語」があるということを示唆しているわけではない。そのような区分は単に便宜上のことである。むしろ、その相違は緩やかなものであり、全てが一つの連続体(“continuum”)の中に在ると考える必要がある。しかし、言葉が一人歩きして、何か特殊な「英語」があるかのようなイメージが一般には抱かれがちである。このような発想は半無意識的に漠然とした、物事への理解から生じているのであろうが、それが実際には大きな問題であり、場合によっては深刻な問題となって具現化することもある。

「一英語」の典型は、以上の例とは多少質が異なるけれども「受験英語」、「使える英語」などという言い方である。「受験英語」などというものは事実存在しないし、そのようなイメージは受験産業が作り出した虚像に過ぎない。敢えて考えれば、「受験英語」とは、大学入試によく出題される語彙、文法事項、出題頻度の高い作家やエッセイなどの総体でしかない。そこには何か特別な訓練が無ければ対処し得ないような専門的スキルが関わっているわけではない。

次に「使える英語」という言い方に潜む問題点を指摘したい。皮肉な逆方向の考え方をして「使えない英語」などというものがあるかどうか考えてみると良いだろう。どの英語教師を考えてみようか、誰一人として自分は「使えない英語」を教えていると思っている人などいない。しかるに『「使える英語」を身につけよう』等といった文言が、例えば、新聞紙上の宣伝の文句として踊っていたりする。「使えない英語」など存在しない。そういうイメージで、例えば、高校での教材などが見られる傾向にあるのは、教材の中で提示される英語がたいてい極めて書き言葉的であり、堅苦しく、しかも“bookish”で“polite”なものである傾向が強いという事実と関わっている。⁴ さらに、もっと重大な事実が学習者の不十分な学習により学んだことが確実にきっちり定着していないということである。中学校、高校での6年間に学ぶ英語を完璧な程度にまでマスターしていれば、その人の英語は十分に通用するし、大学受験についても、たいていの場合に対処できるものである筈なのだ。

以上との関連で、少し専門的な話になるが、ESPとGPEの関係について指摘しておかなければならない。ESPというのは“English for Specific Purposes”ないしは“English for Special Purposes”の略であり、将来ある特定分野の職業を目指す人たち向けの専門的な特殊訓練を行うものである。そのような場合、学習者はやがて英語を現実の場面で使わなければならない切迫性、緊迫性と向かい合うことになる。このESPの下位区分の中には学究目的、研究目的のためのEAP(“English for Academic Purposes”)やパイロットや医療技師などの専門職業的訓練のためのEOP(“English for Occupational Purposes”)等が含まれる。

さて、GPEというのは“General Purpose English”の略で、中学校、高等学校などでの英語教育を指す。そこでの英語教育においては専ら英語という言語の文法構造や基本的な表現様式などが教えられる。学習者もこのような英語を一つの教科目と見なしているだけで、たいていの場合に十分な「動機付け」を有してはいない。しかし、だからと言って、専門的訓練であるESPとGPEの相違をことさら強調する必要はない。言うまでもないが、ESPはGPEという一般的訓練、練習の上に成り立つものであり、その段階で十分に英語の基礎学力を身につけておかなければ、いくらその上に積み上げても「砂上の楼閣」のようなもので、ESPの訓練を

受けようが、大きな成果は望むことが出来ない。⁵

I. 4 Communication と Globalization

“Communication” と聞けば、即 “Spoken English” だと思ってしまう傾向は実に強い。しかし、実際には文明国の多くで、書き言葉による “Communication” は非常に重要な役割を果たしている。そのことは、我々、日本人の日常生活を考えてみても明らかどころである。たとえば、朝、目を覚ますとたいいてい人は新聞に目を通すだろうし、雑誌の記事を読むこともある。また、様々な伝達は書き言葉によってなされている。駅などでの電光掲示板による構内案内、スーパーなどのチラシ等々、枚挙に暇がない。

しかるに “Communication” と聞けば、即「話し言葉」だという印象が抱かれている背景には、少なからずマスコミ、企業などの宣伝が係わっている。英語をペラペラ喋ることが出来れば格好が良い、といった漠然とした印象が一般的に抱かれている。以上のようなマスコミの宣伝は、そのような大衆心理をうまく利用したものである。

インターネットや電子メールなどの発達により、ここ数年書き言葉の必要性、重要性が改めて認識され始めている。多くの外国の様々なホームページから発信される情報はその国の言語が英語でなされている。必要な場合には電子メールを英語で送らなければならない。このような時には、出来るだけ誤解されない、きちんとした文法にかなった英語表現が求められる。

以上の観点から言えば、“Globalization” はもはや ‘just round the corner’ などではなく、むしろ ‘face-to-face urgency’ の所まで来ている、と言える。つまり、もう「待ったなし」の時点にまで来ているということなのである。ちなみに言えば、“globalization” などという言い方は無かったけれども、そのような現実の姿や認識は人類に歴史が始まって以来、どのみち常に存在してきた問題でもある。例えば、中世初期にヨーロッパで活躍したアラビア商人たちはヨーロッパからインド、また時には東アジアまで交易を行ったが、彼らは何カ国語も駆使したという。⁶

また、同じような観点から言えば、John Eliot オックスフォード大学教授が北米南部にあるニュー・メキシコを中心に幾つかの州ではメキシコ系移民やグアテマラ等から移民が夥しく流入して来ており、“Rehispanicization” が 16、17 世紀と違った形で起きていると BBC World Service の放送の中で述べていた。幾つかの文化が交差する地域では常に “globalization” と、それに抵抗する “minority” の民族の衝突という深刻な現実が存在する。

II 学習者に如何に関心を抱かせるか

II. 1 冗談を言う

- 1) 駄洒落も時には有効である。駄洒落、ユーモアを理解するには発想の転換が必要となる。駄洒落は時として語彙習得上の “Keyword Method” と関連している。駄洒落を含めて、多少なりとも高尚な冗談を言えるためには、教師の側にユーモアを楽しむ心のゆとりがある。そのような意味では特に外国語の教師には雑学が求められる。駄洒落を考え出すには、常に縦方向の思考 (“vertical thinking”) ではなく、横方向の思考 (“lateral thinking”) が必要である。⁷ おかしさを醸し出すユーモア、洒落、駄洒落を連発するには、教師自ら頭の訓練をしなければならないだろう。以下に幾つかの具体例を挙げておきたい。

- a) お酒を飲み過ぎた時には「蕎麦」を食べよう。どうしてか。

Answer－「蕎麦」を食べて *sober* になろう。

- b) イングランドの地図を見ていて、*York* の町はしっかり見よう。どうしてか。

Answer－*York* を「よく」みよう。

- c) 英語の先生はいつもお茶を二杯飲みます。どうしてか。

Answer－先生は英語で *teacher* (ティー茶) と言います。

- d) 河童の皿は何で出来ているか知っていますか。金属で出来ていますね。その金属は何?

Answer－銅 (*copper*、カパー) ですね。

- e) 森で鹿に突然出会ったら何て言うか。

Answer－‘Oh, dear!’、‘Dear me!’ と言います。

- f) カラスは何故黒いか、知っていますか。

Answer－*crow* と言いますね。(日本語の「黒」との発音の類似性。*raven* を思い浮かべたのでは答は出てこない。)

- g) 何故英語の先生は我が儘で椅子に座って授業をするのでしょうか。

Answer－‘We are egoistic.’ (英語+椅子) の発音

- h) ニューヨークに行ったら先ず何をするのでしょうか。

Answer－入浴します。

- 2) 言葉遊び(同音異義語)。随分前に「・・・とかけて、×××と解く。その心は」といった言葉遊びが流行っていた(が、今も時に聞かれることがある)。そのような言葉遊びも英語の語彙習得に役立てることが可能である。以下に幾つかの具体例を示しておきたい。

- a) 寺の境内を歩く人と掛けて、滑ってこめかみを打った人と解く。その心は。

Answer－どちらも *temple* です。

- b) 滝を見ている人と掛けて、目を悪くした人と解く。その心は。

Answer－どちらも *cataract* です。

- c) 国会の議員と掛けて、食事療法をしている人と解く。その心は。

Answer－どちらも *diet* です。

- d) シリアの墳丘と掛けて、何かを語るものと解く。その心は。

Answer－どちらも *tell* です。

以上、二種類の方法を提示した。そのような本来の授業内容からの脱線で大変な点は以下のことである。このような冗談が多少なりとも学習者の知的関心を呼び覚ますものであるということ。

II. 2 珍しい語彙を沢山提供すること－別の表現(英英辞典の確認)へ繋がる－

本節のタイトルに「珍しい」と書いたが、それは日本の中学、高校のテキストに登場することが殆どない、という意味においてであることを承知しておかなければならない。例えば、以下のような語彙である。

- | | | |
|----------------|----------------|-------------------------------|
| a) sarcophagus | b) numismatic | c) feline |
| d) philatelist | e) physiognomy | f) cortège |
| g) catafalque | h) cremation | i) inhumation < inhume, humus |

a)～e) のような語彙は博物館などではお馴染みの語彙であり、そのような観点から言えば、

英語圏の子供たちは、小さい頃から何度か耳にもし、自分の目で見て確認している語彙だと言っても過言ではない。小さな子供たちを博物館に連れて来る母親たちは *sarcophagus* という難しい単語をそのままいつも子供に繰り返して聞かせるのではなく、おそらく 'Yes, John. That's an Egyptian stone coffin.' だとかいう言い換えをして子供に分かり易くしている筈である。現に筆者の数度に亘る英国滞在の記憶を辿れば、おもに博物館での母親と小学生低学年くらいの子供たちの会話は、やはりそのようなものであった。

f) と g) については、例のイギリスの Diana 妃の葬儀の折りに BBC のアナウンサーが現に用いたものである。その意味では英語を使用する殆ど全ての人間が耳にしたかも知れない語彙であり、「知らない」あるいは「希な」語彙＝「使われない」語彙という図式は成り立たない。Diana 妃の棺がウェスト・ミンスター寺院 (Westminster Abbey) の礼拝堂に運ばれ、棺台に載せられたが、その棺台が *catfalque* であり、Westminster Abbey までの徒歩での葬列で、棺に随伴した人たちのことを *cortège* と言うのである。この二語はいずれもフランス語からの借用語である。⁸ このような意味では殆ど全世界の人間が耳にしたかも知れない語彙であるから、「知らない」あるいは「希な」語彙＝「使われない」語彙という図式が成り立たないことは既に上でも指摘した通りである。

また、十分な知識があれば、例えば h) と i) に関連付けてイギリスの古代アングロ＝サクソン人の時代のことを話すことも出来るだろう。紀元 8 世紀に書かれた英国最古の叙事詩 *Beowulf* の中で怪物グレンデルと戦って自らも深手を負った主人公のベオウルフは最後の場面で高く積まれた積み薪の上で胴甲等の鎧と一緒に茶毘にふされて結末を迎えている。この物語はキリスト教まがいの感傷を漂わせて結末を迎える。この時の異教性は明白である。過去の歴史を遡ると、キリスト教が正式にイギリスに入ってくるのは 6 世紀後半のことである。『アングロ＝サクソン年代記』によると、キリスト教が正式にイギリスに伝来したのは紀元 597 年のことで、ローマのグレゴリウス大教皇の命を受けた聖オーガスティン (後の初代カンタベリ大司教) 率いる宣教使節団がやって来た時である。それから 200 年くらいが経過していても、やはりアングル人の英雄はゲルマン古来の異教の習わしである火葬で黄泉の世界に送り出されている。

このような歴史の話は、それなりに関心を引く。日本でも古代に仏教が隣の韓国 (当時は新羅、百済) から伝えられたからといって人々は我先に仏教に帰依したわけではない。仏教が浸透して行くまでには随分時間がかかっている。ちなみに、日本で最初に仏教に帰依して、茶毘にふされた大君は「春過ぎて夏来たるらし白妙の衣干したり雨の香具山」という歌で有名な持統天皇である。その墳墓は「天武・持統合葬陵」として現在も奈良県に存在する。このような事実は単に事実として受けとめられているだけで、そのことの歴史的意義や重大さを今日の人間はそうた易く理解しているわけではない。なぜなら、人間は自分が生きている時代の常識や通念に無意識的に支配されており、(一握りの古代学専門家等を除き) 過去の人間の精神活動などに思いを馳せることはなく、たいていの場合に、それは概ね想像の域を出ないからである。

このような話をしてやる事が出来れば、生徒に考古学、文学、歴史等、それこそシュリーマンの『古代への情熱』ではないが、生徒たちの「古代への情熱」を刺激できるかも知れない。

II. 3 教材の具体例との関連

18 世紀の英国の文筆家ジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift) の *Gulliver's Travels* は高校

のリーダーの英語教材としてよく採用されてきた。むろん簡略化されたもので、英語自体も現代の英語に改められている。ただし、高校の教材として採用されているのは、原作の第1部「小人国への旅」(A Voyage to Lilliput)の前半部分である。そこで、時間的余裕があれば、*Gulliver's Travels*について語って聞かせてやるのも良い。以下のように、*Gulliver's Travels*は四部からなる。第一部－A Voyage to Lilliput、第二部－A Voyage to Brobdingnag、第三部－A Voyage to Laputa, Balnibarbi, Glubbdubdrib, Luggnagg and Japan、そして第四部－A Voyage to the Country of the Houyhnhnmsである。

単に物語の構成について知っているだけではなくて、内容についても具体的に知っている方が遙かに良い。例えば、第一部で、リリパットの女王の宮殿が火事になった時に、ガリヴァーには海まで水を汲みに行っている時間的余裕がなかった。そこで、こともあろうに自分の小水で火事を消し止めた。しかし、女王の逆鱗に触れ、結局、裁判の結果、国外追放となる。また、第二部での巨人国で囚われの身となり、見せ物小屋に出されたガリヴァーに腕白学童が、悪戯半分、自分の頭くらいもあろうかという榛の実を投げつけてくる。その時にガリヴァーが、如何に口惜しく、腹立たしい思いを味わったか、といったような次第を話してやる事が出来れば聞いている方も楽しいだろう。

さて、たいてい人間は二度も船が難破し、漂流して、生きるか死ぬか、という苦難をなめたら、それで、二度と航海には出ないかも知れないが、ガリヴァーはそのようなことではへこたれない。また、彼はいつも自分だけが難破した船から助かるという数奇な運命の持ち主でもある。彼は語学の天才とも言い得るほど、行った先々の国々の言語をものすごい早さでマスターして行く。そのようなガリヴァーの姿はあまりにも人間の現実世界からは乖離しており、読者は一種の「ばからしさ」を感じるものだ。

第三部で日本にも来ていること(江戸(Yedo)から長崎(Nangasac)まで旅していること)も聞いている側の関心を引くことである。ちなみに、一つ面白い話をすると、ガリヴァーはある国のアカデミー(学士院)を訪ねる話がある。そこで、ある研究室に一步足を踏み入れるや否や、ぱっとドアを閉めて外に飛び出す。この研究室の主は人間の出す糞尿から食べられる前の原材料を還元しようとする研究をしている。それにしても研究室内の強烈な悪臭にガリヴァーもたじろぐが、学士院の案内人から「そんな失礼なことをしないで欲しい。」と言われて仕方なく室内に入る話がある。これは学者なるものが諷刺されているのである。

第四部で馬の国に行き、完璧なキリスト教的理想像たるフウィーヌム(馬)に出会い、人間の醜悪さを考えさせられる。この国では人間はヤフー(Yahoo)と呼ばれる。ある時、木陰でうつらうつらしていると、発情した雌ヤフーが飛びかかって来たが、この事件を契機に、ガリヴァーは自分が紛れもないヤフーだと思い知らされる。また、ある時、フウィーヌムの首長の前に呼び出され、イギリスのことを話すように促される。ガリヴァーが自分の国では戦争、偽証、不倫、詐欺など、様々な事件が蔓延している事情を話すと、フウィーヌムの首長は人間とは如何に醜い存在であるか嘆かわしい様子を見せる。更に、ガリヴァーに対して、「おまえはどう見てもヤフーだけれども、おまえは変わったヤフーだな。おまえは言語を話すし、知性も多少はある。ところで、おまえは何故服などと称するものを身に纏っておるのか、説明するよう。」求められる。ガリヴァーは困惑したが、「裸でいるのは恥ずかしいし、神様が隠すようにお命じになったものを隠すためだ。」と答えた。しかし、これに対して、「奇妙なことを言う奴だ。先ずもって、自然に身に備わったものを何故隠さないといけないのか、全く理解できない。」

と反論される。

以上のように完璧な理性的動物であるフウィーヌムの世界に直面し、ガリヴァーはフウィーヌムの世界のような世界が本当の理想なのかどうか、深い困惑と疑念（むしろ人間への猜疑心、あるいは人間不信とでも言うべきか）を経験した。やがて、首尾良く、馬の国から自分の国に帰還するが、ガリヴァーは自分を出迎えた妻の抱擁を拒み、自ら檻の中に閉じこもってしまう。このように真剣に人間について悩むガリヴァーの姿を語ってやる事が出来れば、聞いている生徒の関心を刺激できる可能性がある。

また、内容のみならず、18世紀の英語と現代の英語について、例えば、語彙の相違などにつき話すことが可能なら、それも多いに結構である。しかし、高校での以上のような話は、決して文学や英語学への入門ではなく、基本的には生徒に話の面白さを伝えるためなのだ、ということをおぼえてはならない。（後に学習者が自ら『ガリヴァー旅行記』の原作に当たってみたいとも思ってくれれば誠に結構なことである。）

Ⅲ 英語教師に求められる知識

英語教師に求められる知識は様々であって、何をどのようにどの程度にまで知っていれば良いのかが定かではないが、そのような知識について、若干、以下で具体例も交えて示しておきたい。

Ⅲ. 1 言語使用のレベルについて

言語というものは、用いられる様々な状況に応じて厳密に使い分けられるものである。それに個人のスタイル、様々な地域、年齢、社会階層的な変差（variation）について語学教師は理解している必要がある。

例えば、死刑が宣告される被告人を前に最高裁の判事が死刑判決を下す時には、たいてい決まりきった特定の言い方（語彙、発音、表現）が成される。「汝、被告人××を・・・の罪状で死刑に処す。」といった具合である。それを、例えば、関西弁（大阪弁、京都弁）で言えばどれほど滑稽であるか、考えて頂きたい。「わてな、一寸な、おまはんに死んで貰いとうおまねんやわ。」とか、「よろしおまっか、おっさん、死んでや。」等という言い方である。

以上の例は故意に考えられたものであるから、その滑稽さは際立っており、一目瞭然である。言語が日常生活の中で何気なく用いられている状況下では、人はふつう言語使用のレベルや、自分がどのようなスタイルで言語を用いているか等といった問題をあまり（否、全く）意識しないものなのである。そのような意味で、言語使用のレベルやスタイルの問題について語学教師は十分な意識を有しているべきである。また、場合によっては多種多様な教材を用いて、それを如何に教育現場で生徒に理解させるかという困難な問題があるという事実を認識する必要がある。

ちなみに、最初に論じたフランス人の坊やの話もこの問題の一つの具体例である。この問題はCrystalが“language sensitization”と称した問題でもある。⁹

Ⅲ. 2 英語の歴史的発達について相当わきまえていること

このセクションのタイトルで「英語の歴史的発達」と書いたが、それについてどの程度の知

識が必要なのであろうか。「英語の歴史的発達」と銘打つことはいとも簡単であるが、その内容については十分な検討が必要である。

先ず、英語に関係する者なら大なり小なり経験する英語の奇妙さの一つ「同一スペリングに複数の発音」という現象に言及しなければならないだろう。次に挙げる三つのグループの語群のイタリック部分は、各語群ごとに発音が異なっている。そのような事実に関心して頂きたい。

- a) *character, choir, carpenter*
- b) *Charles, chamber, charter, chant, choose*
- c) *Charlotte, chanson*

各語群の発音が異なっているという事実から、一見、英語の発音は気まぐれであるように見える。

しかし、以上の現象は次のような歴史的事実によるものなのである。実は、周知のところであるが、1066年（ノルマン征服（Norman Conquest））以降、英語は夥しいフランス語を借用している。その長い発達の歴史の過程で語彙の借用時期が何時かにより、同一スペリングに複数の発音という、一見、奇妙な結果を見ることになった。a) のイタリック部分の [k] という発音、b) の [tʃ] の発音は c) の [ʃ] の発音の借用時期よりも数世紀も古いものなのである。¹⁰

次に、同一発音に異なるスペリングという今ひとつの奇妙な現象にふれておきたい。これまた、英語学習者にはなじみ深いものである。例えば、英語の長母音 [i:] に対応するスペリングには以下の二種類が考えられる。

- d) *believe, relieve*
- e) *perceive, deceive, receive, conceive*

d) の *believe, relieve* は前者が古英語から、後者は古フランス語から来ている、という興味深い歴史的経過を有している。逆に e) に示された *perceive, deceive, receive, conceive* などの単語は歴史的にはフランス語の “-cevoir” 系動詞からの借用であって、そのため元来のスペリングの名残を色濃く留めている。¹¹ このような事実が明らかならば、スペリングを混同することはなくなるし、自信を持って授業にも臨めるだろう。また、意識の高い意欲ある学習者に語って聞かせてやれば、すばらしい刺激となるかも知れない。

英語学習者がしばしば経験するところであるかも知れないが、英語の発音とスペリングは実に一致しないという気まぐれな事実がある。しかし、これも実は表面的な事実を見ているに過ぎない。また、このような事実を半分真剣に半分冗談で、20世紀初頭のアイランド系劇作家 George Bernard Shaw (GBS と略す) が批判して、英語の発音と綴字法はでたらめだから、例えば ‘ghoti’ と綴って、それを [fiʃ] と発音できると主張した。あまりにも有名な事実だ。しかし、この発音が可能であるためには、英語発音の例外ばかりを繋げなければならないから、このような発音は実際には不可能である。やはり発音とスペリングの間には一般的ルールがある、ということが分かるだろう。[fiʃ] という発音が可能である根拠は、次のような単語のイタリック部分を繋げれば良いことになる。 *enough, women, station* の下線部分に注目して欲しい。 *gh* というスペリングを書いて [f] と発音するのは *laugh, cough, enough, tough* 等の若干の語彙の語末に来ている場合に限られている。また、 *o* と書いて [i] と発音する例は *women* しかない。さらに、 *ti* というスペリングで [ʃ] と発音する場合は *station* 等のように語中にある場合で、単語の末尾ではない。つまり、単語の末尾に *-ti* というスペリングがあれば、ふつうは [ti] あるいは [tai] といった発音が予測されるものである。これは、言い換えれば、その

ような発音が英語では一般的なのだ、という事実を示唆する。このような発音上の規則性は半ば無意識的に経験を通して身に付けられているのである。

以上との関連で、ストレス（強勢）とスペリングの関係についてもふれておかなければならないだろう。先ず以下の二種類の語彙を見比べて頂きたい。

f) refer、prefer、confer、defer、infer / reference、preference、conference、deference、inference

g) occur、recur、concur、incur / occurrence、recurrence、concurrency、incurance

f) 群、g) 群ともに動詞は第二音節に第一強勢が置かれるのであるが、名詞は f) 群の場合、第一音節、g) 群の場合には第二音節に置かれる。そのことはスペリングにも反映されていることがおわかり頂けるものと考ええる。即ち、g) 群では *-rr* と *r* がダブっているのがご理解頂けることだろう。視覚的にもスペリングの発音を学習者に推測させてくれるヒントが見出されるものだ。

Ⅲ. 3 言語はどのように身に付いていくものなのか

どの言語でも母国語は、だいたい4才半頃までにはほぼ全ての文法構造がマスターされるものである。¹² 加えて、ある種の研究から第二言語として英語を身に付ける事例の場合、年齢、国籍に関係なくほぼ同じような傾向で文法形態素が習得されて行くことが確認されている。¹³ さらに、言語の発達は例外の発見の過程と言っても良さそうな面がある。¹⁴

以上の議論の具体例として動詞の過去形の発達を取り上げて良いだろう。例えば、母国語として英語を習得する幼児によく観察される事例には次のようなものがある。(以下の話は飽くまで発音上のことなのであり、スペリングのことを言っているのではない、ということを理解しておいて頂きたい。しかし、このような指摘は実際は老婆心からなのであり、本来、指摘するまでのことは無かった。なぜなら、三つくらいの幼児がどうして十分なスペリングを知っているかということを考えれば、筆者の論点は明らかだからである)。*bring* という動詞の過去形については、幼児の早い一時期にほんの僅かな期間 *brought* という発音が聞かれる。これは明らかに幼児が自分の周囲の大人の発音を模倣したのである。しかし、言語の発達は様々な混乱と混同の繰り返しの過程である。そのため、一時期ながら子供の頭の中でマスター中の言語の文法規則のメカニズムにあやふやさが起きる。この時に幼児の膨大な言語経験と相まってルールの過度の一般化が生じ、殆ど例外なく幼児による *bringed* という発音が観察されている。これは明らかにマスター中の言語の一般的ルールが過度に適用された具体例であることは言を待たない。それから、ある「一定」の時期を経て子供は *brought* という発音に再び戻って来る。この場合は、子供はもはや大人の発音を単に模倣したのではなく、*brought* が例外なのだという認識が芽生え、その実践を自ら行っているのである。¹⁵

以上の語彙の発達に加えて、ある種の統語的文法関係についてもやはり一般的な規則への例外の発見が、そのような統語的文法関係を有する文の意味解釈に関係している、という事実を指摘したい。この事実を幾つかの具体例に即して論じたい。例えば、次のような文法構造を考えてみよう。NP₁+VP+NP₂+to-Inf という統語構造を有する語連続である。このような統語構造になった文の to 不定詞 (to-Inf) の意味上の主語 (論理主語) はたいていの場合に NP₂ である。そのような解釈を可能にする原則を “MDP” (Minimal Distance Principle¹⁶ の略) と称している。この原則は to 不定詞の意味上の主語はそれから最も近い位置にある前方の名詞句

である、とするものである。例えば、以下のような例を検討して頂きたい。

- a) I order Tom to go there at once.
- b) John told Baker to finish his work by five.
- c) Cathy asked me to write a letter for her.
- d) John promised us to return home as soon as possible.
- e) We asked Tom what to do next.

以上の例文で d) と e) は MDP への例外である。(その理由を扱った議論については中田(1980、1997)¹⁷ を参照して頂きたい。) なぜなら、各文のアンダーラインで示されているように to 不定詞からは遠い位置にある文の主語が不定詞の意味上の主語として機能しているからである。

この MDP への例外的な文の存在は、だいたい7才くらいになると正しく経験的に見抜けるようになるが、10才くらいの年齢になっても、この MDP への例外が見抜けない子供がいる。¹⁸ 今「経験的に」という言い方をしたが、それは、言語が身に付いていく上で、ある非常に大事な事実を暗示している。つまり、文(むしろ、様々な程度に不完全な文法構造を有する発話)というものは単独で、全く社会状況と関係なく用いられるものではない、ということである。日常の言語活動を考えた場合、発話という単語の連続を子供は耳にするわけで、そこから発話者の意図した意味を推測する手だてが自分の置かれている社会状況なのである。すなわち、子供は身の回りで、「誰が誰にいつ何をどのように行うのか」を偶然ではなく、必然的に自分も係わっている社会状況に照らし合わせて推測するのだ、と言える。さらに言えば、どのような文法構造が、どのような状況下でいかなる意味解釈をすべきものなのかを子供は帰納的に、しかも類推的に身に付けていくものだと言える。なおこの議論の論点に関しては、中田(1997)及び Jepsersen (1965) を参照して頂きたい。¹⁹

さて、生徒が一般的な発音や文法事項を間違えた場合いかに理解させれば良いのであろうか。例えば ‘I am looking forward to see you soon.’ 等と生徒が言った場合、以下のような例を出すと良いのではないだろうか。日本語の「学校」は「がっこう」であって「がくこう」ではない。この促音便は日本語の発音では一般的である。一般的な規則を間違えると非常に奇妙である。これは一つの示唆なのであり、必ずしも絶対的なものではない。

III. 4 Usage と表現に明るいこと

ここで言う ‘usage’ という用語は必ずしも Widdowson らの主張しているかなり専門的な含みを持たせた術語²⁰としてではなく、ごくふつうの日常の言語使用の中での言語の語法、用法ほどの意味として使っているのである。

まず英単語のスペリングについて考察して頂きたい。例えば *center* – *centre*、*check* – *cheque*、*maneuver* – *manoeuvre*、*medieval* – *mediaeval*、*theater* – *theatre*...等の例で、それぞれ各ペアの右側に書かれている単語が、いわゆるイギリス英語の単語である。フランス語に馴染みある人ならイギリス英語の単語をフランス語だと言うかも知れない。*centre* はフランス語でも全く同一スペリングである。ただし発音は異なっている(英語は [sɛntər] であり、フランス語は [sɑ:tr] である)。*theatre* は英語では [θi (:)ətər]、一方フランス語は *théâtre* というスペリングで、発音は [tea:tr] という具合に、多少、異なっているものの、英語の単語がフランス語からの借用であることは容易に推測出来る。

次に、今少し単語についてさらに考察したい。英語を一寸勉強すると、同じような意味を有した幾つかのペアになりそうな語彙に出会うものである。例えば、以下のようなものである。*dormitory-hall*、*radio-wire*、*subway-underground (tube)*、*airplane-aeroplane*...以上のような例は他に幾つもある。問題はこのような事例の場合には何か一般的な原則をなかなか見い出せないということなのである。このような事例で、やはり右側の単語がイギリス英語なのだが、そのような事実の説明として考え得るのは単に社会、文化、慣習的相違から英米で異なる語彙がよく用いられて来たのだろう、ということくらいである。

筆者の講演の中では全く触れなかったが、英語とフランス語の関係を考える時には、以上の議論との関連で、さらに幾つかの事実に出会うものである。しかし、このような事例を本論の中に組み込むと議論をさらに煩雑にさせると思われるから巻末の注として記してある。²¹

さて、次に語彙・表現のレヴェルでのアメリカ英語とイギリス英語の相違を考察してみたい。言うまでもないが、次の a) 群はアメリカ英語で、b) 群はイギリス英語である。アメリカ英語に関しては日本の中学・高校の英語教育の中で教えられる可能性が高いから以下の a) 群について学習者はよく耳にしたり見たりしている筈である。しかし、b) 群についてはかなりの知識が求められるだろう。

a) We'll soon be arriving at Tokyo Terminal.

The conductors' rooms are in cars No. 7 and No. 10.

We'll be stopping at Bayswater, ...

Watch your step, please.

b) We're now approaching London Euston. (列車はまもなくロンドン、ユーストン駅に到着いたします。)

This is the guard speaking. (こちら車掌でございます。)

We are calling at Crewe, Chester.... (当列車はクルー、チェスター...に停車いたします。)

Please mind the gap. (列車とプラットフォームの隙間に御注意下さい。)

b) については訳も付記しておいたので、アメリカ英語との違いを実感して頂けるだろう。

Ⅲ. 5 和製英語 (類するもの) について

英語の単語だけれども、英語では通用しないもの。真剣に検討すれば、沢山見出されるかも知れないが、ここでは主に車に関する語彙を示しておきたい。以下の各例で和製英語と、それに対応する正しい英語を () 内に示してある。ハンドル (*steering wheel*)、バックミラー (*rear-view mirror*)、フロント・ガラス (*windshield*)、等々。また、よく耳にするものとしてベッド・タウン (*dormitory town*) が挙げられる。アルバイト (*part-time job*) もよく耳にするが、これは英語からの借用ではない。

英語の単語をそのまま、模倣したものだが、発音が相当異なるものも数多い。例えば、タオル (*towel* [táuəl])、タワー (*tower* [táuər])、ウラニウム (*uranium* [juərə́iniəm / ---njəm])、ポンド (*pound* [páund])、ベビー (*baby* [béibi (:)]) といった具合に対応する英語の単語は二重母音 (場合によっては三重母音) の発音である。

人名、地名、国名は特に注意を要するものが多い。以下で若干の具体例を示しておきたい。アレキサンダー (*Alexander* [æligzæ (: ndrə / ---zá:n---)])、パウロ (*Paul* [pó:l]) 等の人名。ローマ

(*Rome* [róum / rǝum]), フィレンツェ (*Florence* [flɔ (:) rəns]), 満州 (*Manchuria* [məntʃúəriə]), シベリア (*Siberia* [saibíəriə]) 等の都市名や地名。イタリア (*Italy* [ítali]), スウェーデン (*Sweden* [swí:dn]), ノルウェー (*Norway* [nɔərwei]) 等の国名など。以上、僅か数例を挙げたに過ぎない。そこで、学習者自ら地名辞典などに慣れ親しむ習慣を培って頂きたいものだ。

III. 6 言語には恣意的な面があることへの理解

言語は様々な面で様々な程度に気まぐれなものである。それは、言語というものが長年の間に各民族独特のありようで社会習慣的に形成されて来たということを示唆しており、その形成過程が必ずしも一致していない事実を物語っているのかも知れない。

先ず、発音の面に注意して頂きたい。例えば、日本語の「一生」は「いっしょう」であって、「いっせい」でもなければ、「ひとなま」でもない。また、「生活」は「せいかつ」であって、「しょうかつ」でもなければ、「なまかつ」でもない。このような誤りは母国語として日本語を話す人には許されないし、誤解される場合もある。以上の発音の問題は社会的約束事なのであって、日本語の音声の繋がり方の規則（音韻論）の問題ではない。なぜなら、「いっせい」とか「しょうかつ」という発音は、発音可能性から言えば、事実、発音可能だからである。このようなことをきっちりわきまえていることが教育を受けた日本人としての証拠なのである。

次に英語の発音とスペリングの関係についてどのような問題があるかを指摘したい。先ず、次の一連の語彙を見て頂きたい。*behave*, *cave*, *compete*, *excavate*, *recite*, *revive* 等の単語である。その語尾の *-e* が黙字である場合、その直前の母音は二重母音化 (“diphthongization”)、あるいは長母音化される。しかし、その原則に合わない例が若干存在する。そのような単語は例外なのであり、たいていが、借用語か人名などである。具体例として *recipe* [résəpi], *St. Augustine* [s(ə)ntə:gástin] 等が挙げられるだろう。

言語には必ずなにかがしかの余剰的な側面がある。コンピュータによる計算のように完璧でないのが人間の言語なのであり、その柔軟さと不完全さ、余剰性が自然言語の一つの特徴であると考えても良い。例えば、英語の *I think*, *you think*, *he thinks* を考えると、主語が語彙的に形式的に具現化されているから、三単現の ‘s’ は不必要である（歴史的経緯のことは然るべき文献に当たって頂きたい）。しかし、言語は慣習的に守られているものであるから、一度定着したことは、それが身近なものであればあるほど、いかに理不尽であっても変更されはしない。

現代英語の不規則動詞について簡単に触れておかなければならないだろう。例えば、周知のごとく *see*, *do*, *become*, *have*, *make*, *catch*, *bring*, *write* などの動詞は、語根の母音を交替させて活用させる不規則変化動詞である。しかし、今から 1,000 年くらい以前に遡って古英語（アングロ＝サクソン語）の時代には、そのような動詞は「強変化動詞」と呼ばれ、むしろ普通であった。²² このような現在の不規則変化動詞はすべて日常生活に密着したものであったから、いかに奇妙であっても忘れられず生き残ったのである。

III. 7 発音に敏感であること

これは音声学、音韻論の問題である。英語の *Pat* vs *stop* を考えよう。発音記号は [pæt] と [stɔp / stáp] ということで、発音記号上 [p] に違いはない。しかし、[pæt] の場合の [p] は [stɔp / stáp] の場合の [p] よりも遙かに強く発音される。専門的には前者は「氣息音 (“aspirated”)」と呼ばれ、後者の無氣息音 (“non-aspirated”) と区別される。しかし、二つの

[p] の発音は今述べたような簡単なものではない。例えば、[pæt] の [p] の場合には発音直前に口の周りの筋肉にももの凄い力が掛かっている。それは発音直前に口の中一杯に呼気が溜められているからであり、それが一気に解放される。そのため、[pæt] の [p] は [stɔp/stáp] の [p] よりも遙かに強烈な破裂を伴って発音される。[stɔp/stáp] の [p] の場合には、その直前の母音 [ɔ/a] の発音時に開口した状態で呼気の大半が失われてしまっているため、[p] という破裂音の発音に必要な、口をしっかりと閉じた上での十分な破裂を伴わせることが出来ないのである。

次に *Lander vs Paul* の場合も同様に専門的には前者は「明るい l」(“clear [l]”)、後者は「暗い l」(“dark [ɫ]”) と呼ばれ、記号も少し違っている。「明るい l」の場合、舌先が上の歯茎の裏側辺りにきつく押しつけられている。そのため舌先にかなりの力が掛かっている。逆に「暗い l」の場合、舌先に殆ど力が掛けられておらず、舌の位置もずっと後方にやられ硬口蓋に触れることもない。以上のような発音の相違をこと細かく記述するとなると、発音記号は非常に煩雑なものになってしまう。経験を積んだ者には以上のような相違は概念的にも実践的にも理解され易いだろうが、経験少ない学習者にはそれほど簡単なことだとは言えない。

以上、論じてきた発音の微妙な相違の問題が示唆することは以下のようなことである。音声学的にはそれぞれ別の音だと考えられる音声が、辞書では同じ記号で示されており、そのため不用意な学習者は、いずれの場合も同じように発音するものと半無意識的に思いこんでしまうかも知れない、ということである。

Ⅲ. 8 異文化の国々に自ら出かける機会を可能な限り実現すること

外国の文化を紹介する書物やビデオ・テープなどが数多く存在するから、そのような材料を様々な程度に活用することは結構である。しかし、そのような材料はそれを編纂した著者たちの観察したものであるから、必ずかなり多くの欠落が必然的に存在する。さらには、実際の町の佇まいや雰囲気などは現地でないとは体感されないものである。自分の目、耳で実際に体験するという意味から可能な限り出かけるようにする必要がある。²³

Ⅳ まとめ

Ⅳ. 1 なぜ英語を学ばなければならないのか？

これには様々な理由が考えられようが、以下に幾つか示しておきたい。

- 1) 知らないことは学ばなければならない。何事によらずこのことは事実である。
- 2) 知らないとは損をする。外国語として英語を身につける場合、“speaking ability” の基礎はやはり、知的技術である。十分に身につければ、一生の財産となる。
- 3) 経済的に利点が多い。英語が十分に出来れば、通訳なしで旅行に出かけることもでき、高額出費が不要となる。また、外国で他人を助けることも出来る。報酬を求めない援助が本当の高尚な援助の精神であり、その実践が英語使用と関係していれば、なおさら素晴らしい。
- 4) 英語に関連する知的職業に就くことが出来ない。
- 5) 英語嫌いな人であっても、未来永劫英語と関わる事が無いとは誰にも言えない。将来の僅かな可能性のために勉強するという事情もある。

IV. 2 言語教師は何を期待すれば良いのか？

英語教師は様々なレベルで様々な方法を駆使して学習者を知的に刺激すべく常に自ら知的好奇心のアンテナを張り巡らしておく必要がある。言語教師は、先ずもって学習者に言語についての意識を鋭敏にさせるように努める必要がある。しかし、この方法は基本的に学習者に英語への知的関心を呼び覚ますものであるべきで、そのことは本論の中でふれた。さらに、本格的なグローバル化に直面する情勢となった今、外国語の勉強は単にその言語の習得のみならず、その言語を取り巻く文化をも理解する、という古くて新しい問題を再認識しておく必要がある。

英語教師の願うところは、一義的には、学習者に英語への関心を抱かせることである。しかし、英語に限らず学習者に知的好奇心を抱かせることが出来れば、それでも良いのではないか。そのようにしながら、学習者が経験を積み、知識を身につけて行くに連れて、仕事の必要性から、あるいは自己啓発・自己修練、はたまたその他諸般の事情で、やはり英語も相当知らないといけないという深い認識に至る可能性は十分にある。そのためにも、教える側が折にふれ、多様な興味深い雑談を通して生徒の知的好奇心・関心の芽を育ててやる必要がある。

注

注を付す上での基本姿勢として最低限必要なものに留めるように努めた。参照して頂きたい文献は数多く挙げられるが、それらを網羅するとなると、かなり膨大なものになってしまう。それ故、参考文献も必要不可欠なものを掲載させて頂いた。

- 1 古代ギリシアの哲学者についての議論は M. I. Finley (1972) の優れた論考がある。
- 2 イタリア・ルネッサンス期のダビンチらについては、ロンドンの National Gallery 館長を 10 数年つとめ、日本でも NHK 教育番組「世界の名画」でお馴染みであった、ルネッサンス文化の碩学 Kenneth Clark 教授 (オックスフォード大学教授) の優れた論述 *Leonard da Vinci* (1959) を参照して頂きたい。
- 3 フランス人の坊やの話との類例については、David Crystal (1985: 20) を、また、学校で習った知識が全てだという稚拙な思いこみについては Hughes & Trudgill (1979) を参照して頂きたい。
- 4 例えば、David Crystal (1985 : 21-2) に同様の指摘がある。
- 5 H. G. Widdowson (1979) に収められている、‘The Authenticity of Language Data’ で行われる ESP の議論を参照して頂きたい。更に専門的には Widdowson (1983) を参照して頂きたい。
- 6 David Wilson (1981 : 92) 参照。
- 7 例えば、Edward de Bono (1973 : 9) 参照。
- 8 例えば、Salvatore Adamo の ‘**Tombe la neige**’ (「雪が降る」) という有名なシャンソンの一番の歌詞の中に *cortège* という語が登場する。歌詞は次の通り。Tombe la neige / Tu ne viendras pas ce soir / Tombe la neige / Et mon cœur s’habille de noir / Ce soyeux *cortège* / Tout en larmes blanches / L’oiseau sur la branche / Pleure le sortilège / Tu ne viendras pas ce soir / Me crie mon désespoir / Mais tombe la neige / Impassible manège.
- 9 David Crystal (1985 : 35) 参照。このような言語使用のレベルやスタイル等、日常の言語活動の実相を研究する分野は近年、「語用論」(pragmatics) として研究が盛んになってきている。中でも J. L. Mey (1994)、Michael Stubbs (1983) 等の文献において標準的な論考が行われている。
- 10 a) と b) の *ch-* 及び *c-* の発音については以下の簡潔な引用を参考にして頂きたい。
L/k/ (a, au の前) はフランスの大部分の地域では /tʃ/ となったが NF は /k/ を保つ。ME の借入語には /tʃ/ の音をもつもの (chair / chapel (e) / chaunce / meschef) と /k/ をもつもの (carpenter / cas / scars / market) がみられる。またつぎのような二重語を生じた: chace (n) – cac (c) he (n) / char (re) – car (re) / chatel – catel / roche – rokke / chartre – cartre / chaumbre – caumbre。(中尾、1972 : 80)

以上の解説で、LはLatin（ラテン語）、NFはNorman French（ノルマン系フランス語）、MEはMiddle English（中英語）のことである。この中英語は早期の段階でNorman Conquest以降の12、13世紀の頃である。

またc)の/j/については恐らくルネッサンス後期（16世紀後半）あたりで、フランス語からの借用語を発音、綴り字ともにそのまま維持しようとした。これはテューダ王朝からステュアート王朝への交代期の17世紀初頭、英国貴族や上流階級を中心にフランス心酔が起きたこととも関連する。（モセ、1963: 140参照）

- 11 d)の*believe*はそもそも古英語（アングロ＝サクソン語）に起源を有する語彙である。ME. *bileven* < OE. *belyfan*という経過を経て現代の英語に至る。一方、*relieve*は次のような歴史的経過を経て現代に至っている。ME. *releven* < OF. *relever* < Lat. *relevare*。従って、*believe*と、そもそもラテン語起源である*relieve*は中英語の段階でどちらも同じ語尾を有する形になってしまっているのが分かる。

他方、e)群の語彙は全てフランス語からの借用であった。それは本文でも指摘した。以下に各単語の借用経過を記す。（以下のOF.はOld French、ONFr.はOld Norman French、Vulgar Latinは「平俗ラテン語」。）

perceive: ME. *perceiven* < OFr. *perceivre* < Lat. *percipere*

deceive: ME. *deceiven* < OFr. *deceveir* < Vulgar Lat. *dēcipere* < Lat. *dēcipere*

receive: ME. *receiven* < ONFr. *receivre* < Lat. *recipere*

conceive: ME. *conceiven* < OFr. *concevoir* < Lat. *concipere*

以上、簡略化された各語彙の歴史的発展の経過については*The American Heritage College Dictionary* (3rd ed.)を参考にしたが、更に詳細については、*OED*に当たって頂きたい。

- 12 このようなことを指摘している文献は数多い。例えば、Margaret Donaldson (1978)、Peter A. de Villiers & Jill G. de Villiers (1979)、C. E. Snow and C. A. Ferguson (1977)、中田 (1990) 等。
- 13 H. Dulay, M. Burt & S. Krashen (1982)、Romaine (1984) 等参照。
- 14 中田 (1994b : 35-39)、中田 (1997 : 34-38) 参照。
- 15 Margaret Donaldson (1978 : 33) 参照。
- 16 MDP (Minimal Distance Principle) は Peter S. Rosenbaum が 'A Principle Governing Deletion in English Sentential Complementation' (1965) の中で初めて用いた用語である。Rosenbaum (1967 : 6) では "erasure principle" として形式化されている。本文の中で「to 不定詞の意味上の主語はそれから最も近い位置にある前方の名詞句である。」と述べたが、厳密に専門的に言えば、埋め込み文の「節」("node") の数と、その "node" 内での名詞句の位置である。
- 17 中田 (1980) 「英語不定詞構文の意味解釈を巡って」、梅花女子大学文学部『文学部紀要』16号。d)、e) に関して、意味上の主語が文頭の主語である事実は中田 (1997 : 34-38) 参照。
- 18 Carol Chomsky (c 1969 : 25-32, 100-101) 参照。
- 19 中田 (1997 : 38-40) 及び Jepsersen (1965 : 162)。
- 20 H. G. Widdowson (1978, 1979) の中でしばしば用いられている "usage" は、単に文法知識を言語運用の中に実現するだけであるのに対して、"use" は文法知識が言語運用の中に文脈に即して適切に実現されることを指している。
- 21 例えば、*ask*—*demand*、*house*—*domestic*、*hand*—*manual* 等のペアでは名詞は英語起源、形容詞はフランス語起源である。これも長年の英語の歴史を通じて膨大なフランス語の語彙が借用された結果である。興味深い事実は、英語の話し手たちが日常生活で相変わらずゲルマン起源の（一音節の）単語を使っているという事実である。例えば、人にもものを「尋ねる」場合、*ask*という動詞が通常は用いられている。逆に *demand* といった動詞が用いられることはない。*demand* を何気ない普段の会話に持ち込むと、何となく場違いで、堅苦しく、また気取った様な感じも醸し出される。また、*confidence*—*confidence*、*confidence* 等のペアでは、全てフランス語の単語なのだが、元来のフランス語で二つの別の単語が有していた筈の異なる意味が英語に借用された *confidence* という一つの単語の中に集約されてしまっている、といった愚かな混同が生じた。

- 22 例えば、前島（1988）、森田他（1989）等を参照して欲しい。
- 23 この文脈で書物等に内在する自ずからの限界を示唆した。筆者は英国滞在に題材を求め、かなり個人的な色彩の強い *British Memories* (1994a) なる書物を著しているが、一つの試みとして参考にして頂ければ幸いである。

参考文献

- ウィルソン、D.、（中田康行（Nakata, Y.）訳）、『アングロ＝サクソン人』京都、晃洋書房、1983。
- Chomsky, Carol, *The Acquisition of Syntax in Children from 5 to 10*. Cambridge, Mass., MIT Press, 1969.
- Clark, K., *Leonard da Vinci*. Harmondsworth, Penguin Books Ltd., 1959. (originally published by Cambridge University Press, 1939.)
- Crystal, D., *Linguistics* (2nd ed.). London, Penguin Books Ltd., 1985.
- De Bono, E., *Lateral Thinking: Creativity Step by Step*. New York, Harper and Row, 1990 (originally published as Harper Colophon edition in 1973).
- De Villiers, P. A. & de Villiers, J. G., *Early Language*. Glasgow, Fontana Press, 1979.
- Donaldson, M., *Children's Minds*. Glasgow, Fontana Press, 1978.
- Dulay, H., Burt, M. & Krashen, S., *Language Two*. New York, Oxford University Press, 1982.
- Finley, M. I., *Aspects of Antiquity*. Harmondsworth, Penguin Books Ltd., 1972.
- Hughes, A. & Trudgill, P., 'Variation in English' in *English Accents and Dialects*. London, Edward Arnold, 1979.
- Jespersen, O., *The Philosophy of Grammar*. New York, Norton & Company, Inc., 1965 (first published in 1924).
- 前島儀一郎 (Maejima, G.)、『英独仏語・古典語比較文法』東京、大学書林、1988。
- Mey, J. L., *Pragmatics: An Introduction*. Oxford, Basil Blackwell, 1994.
- モセ、F. A. (Mossé, F. A.)、(郡司利男、岡田尚訳)『英語史概説』東京、開文社 1963。
- 森田貞雄、三川基好、小島謙一 (Morita, S., et. al.)、『古英語文法』東京、大学書林、1989。
- 中尾俊夫 (Nakao, T.)、『英語学大系 第9巻 英語史Ⅱ』東京、大修館書店、1972。
- 中田康行 (Nakata, Y.)、「英語不定詞構文の意味解釈を巡って」、梅花女子大学文学部『文学部紀要』16号、1980。
- 中田康行 (Nakata, Y.)、*Fundamentals of College English Grammar*. 東京、三修社、1987。
- 中田康行 (Nakata, Y.)、*Language Acquisition and English Education in Japan*. 京都、晃洋書房、1990。
- 中田康行 (Nakata, Y.)、*British Memories*. 大阪、大阪教育図書、1994a。
- 中田康行 (Nakata, Y.)、『学校文法から始める英語学』京都、晃洋書房、1994b。
- 中田康行 (Nakata, Y.)、『応用英語学の研究』京都、晃洋書房、1997。
- Romaine, S., *The Language of Children and Adolescents: The Acquisition of Communicative Competence*. Oxford, Basil Blackwell, 1984.
- Rosenbaum, P. S., 'A Principle Governing Deletion in English Sentential Complementation,' IBM Research Paper RC-1519. Yorktown Heights., New York, 1965.
- Rosenbaum, P. S., *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*. Cambridge, Mass., MIT Press, 1967.
- Snow, C. E. & Ferguson, C. A., eds., *Talking to Children: Language Input and Acquisition*. Cambridge, Cambridge University Press, 1977.
- Stubbs, M., *Discourse Analysis*. Oxford, Basil Blackwell, 1983.
- Widdowson, Henry G., *Teaching Language as Communication*. Oxford, Oxford University Press, 1978.
- Widdowson, Henry G., *Explorations in Applied Linguistics*. Oxford, Oxford University Press, 1979.
- Widdowson, Henry G., *Learning Purposes and Language Use*. Oxford, Oxford University Press, 1983.
- Wilson, D. M., *The Anglo-Saxons* (2nd ed.). Harmondsworth, Penguin Books, Ltd., 1981 (first published in 1975).

中 田 康 行

- * 本講演は筆者が2002年6月27日に三重県高等学校英語教育研究会の席上「グローバル化の中での英語教育」と題して行った講演を指す。三重県教育委員会主催、三重県教育研修分野・総合教育研究センター。